

組立て試論 シナリオ検討編

コロナ禍はこれまでに日本を襲った経済危機と異なり、「人の命と主権」、「個—地域—社会・公共—経済市場とのベストな関係開発」を見出すための、新しい社会資本のあり方への見直しを迫られた。

新しい施策である、「新しい資本主義」、「デジタル政策」、「田園都市構想」を牽引していく上で、しっかりとした骨格をもった日本のマスタープランが必要。
 (30年前につくられたが、以降、つくられていない。石原信雄元内閣官房副長官 談)

この組み立てを行っていく上で、「どのような地域と国の方向に向け」、「どのような構造のもとで実現させて行けば良いのか」についての羅針盤づくりを行いたい。

○ 1992～95年時の、インターフューチャー(現在)に贈ることを目標とした—— 「日本のマスタービルダーによる日本のマスタープラン」 (正式名:社会資本と公共投資のグランドデザイン計画):

参画者(マスタービルダー): (順不同・敬称略)
 平岩外四、牧野昇、石原信雄、唐津一、内田健三、梶原拓、平松守彦、
 河合三良、河合隼雄、永野健、藤井治芳、御巫清泰、下河辺淳、溜水義久、
 小長啓一、丹呉泰健、飯田経夫、高丘季昭、久保園晃、稲葉秀三、中内功、
 成田豊、吉川淳、村田光平、椎名素夫、大角晴康 他 / 事務局長: 鈴木浩二

● 今回の「日本の新しいマスタープラン」づくりに向け:

1. 「目標」とは—

現行迫られている、「新しい資本主義」、「デジタル政策」、「田園都市構想」実現の羅針盤となる、日本の新しいマスタープランを検討・作製する。

これまでのあらゆるものに対する見直しと、マネジメント力のある新しい構造をつくっていく姿勢を持つこと。

2. 共通したコンセンサスとして——

“誰にとっても分かりやすく、熱く胸を打つ目標と組み立てのために、
 いかなるものにも臆することのない、主体者(国民)のための構造が欲しい。”

“国民が自律的に動けるようなマスタープランづくり”

“主体者(生活者・国民)が成長への夢を見ることのできる構造が欲しい。”

与件として——

「成長と配分の見直し」とデジタル化による「新しい効率性の追求」より、

- ① 主体者が何であるかを考える。
- ② 資本・資源・制度の見直しへの、「個人」のアクティビティ資源を重視。
- ③ 「自治圏＝地域」から「生活・自治圏＝社会域」指標への制度設計の変更。
- ④ 地域・国土へのモビリティ指標から、アクティビティ指標へのプログラム変更。

3. 検討項目:

- 1) 生活者・就労者の利益へとダイレクトにつながる社会資本(新しい資本主義、デジタル政策、田園都市構想)の内容と具体的なメニュー。及びこれにより得られる生産内容(数値含)は?
- 2) 社会・経済の成長への社会資本整備(新しい資本主義、デジタル政策、田園都市構想)の具体的なあり方と、短期・中期・長期ビジョンとは何か。
- 3) 地域から始めていく新しい取り組みに向け、地域の自治体と事業者が自ら取り組んでみたいという“プログラムの内容”と、“何をすればかなえられるのか”を、どのように分かりやすく明示することができるか。
- 4) これらの新しい取り組み(新しい資本主義、デジタル政策、田園都市構想)が、これまでにない、どのような新しい市場を産むことができるか。特に、“地域のあらゆる業種・業態の事業者が再興することのできる構造”と、新しい施策を行う機関より提供できるインセンティブ、インフラはどういったものか。また、数値で示すことはできるか。
- 5) 「新しい資本主義」からの、これまでにない「新しい市場づくり」とはどのようなものか。既国策の限界の反省(「e-Japan」「テレトピア」「テクノポリス」「インテリジェントシティ」他/石原信雄顧問 談)より、「成長と分配の好循環」に向け、消費突破戦略を優先。
- 6) 田園都市構想実現が生むことのできる、日本独自の新しい生活・都市様式からの新しい産業の内容と、生産規模(数値化)のシナリオ(短期、中期、長期)を、どのように明示できるか。